千葉大学大学院人文公共学府　研究プロジェクト報告書　359 集　pp.22-32　2021 年
『客観的世界と人称的世界についての研究』

フッサール『デカルト的省察』における固有領域の意義

―自己経験が及ぶ範囲について―

The Significance of the Sphere of Ownness in Husserl's *Cartesian Meditations*

--About the Extent of Self-Experience--

田中　奏タ
Kanata TANAKA

要旨

本稿では、E.フッサール後期の主著『デカルト的省察』「第五省察」での固有領域の意義を明らかにする。第一節では、フッサールが他者経験論を展開した理由を明らかにする。第二節では、他者経験論がどのようにして展開されたのかを本稿の課題に関係する限りで確認する。第三節では、固有領域への還元を出発点とする議論を独我論とする批判を提示し、第四節では、この批判に対する応答を試み、固有領域の意義を明らかにする。

Abstract

In this paper, I will clarify the significance of the Sphere of ownness in Husserl's the *Fifth Cartesian Meditation*. First, I explain why Husserl developed his theory of other experience and I show how the theory of other experience was developed, as far as it relates to the issues in this paper. Next, I present the criticism that discussion starting from the Reduction to the Sphere of ownness is solipsismus. Finally, I try respond to this criticism and clarify the significance of the Sphere of ownness.

はじめに

本稿の目的は、E.フッサール後期の主著『デカルト的省察』（以下『省察』と略記）の「第五省察」で提示された「固有領域（Eigenheitssphäre）」をめぐる議論の意義を明らかにすることにある。より正確に言うと、「第五省察」での他者経験論への批判、とりわけ、固有領域への還元に対する独我論としての批判を吟味することによって、フッサール自身が目指していたものを明らかにする。

そもそも固有領域を中心とする他我構成は、他者経験論の躓きの石としてかねてより批判されてきた。例えば、対話哲学のヴァルデンフェルスは、固有領域を他者経験論の出発点とすることによって、自我中心的な他我構成を避けることができなくなり、独我論という批判を免れないと指摘している（vgl.Waldenfels 1971, 33）。さらに、ザハヴィ

は、フッサールがとる還元という哲学的方法論自体が現象学の研究領野を個人の意識へと制限しているように見えることから独我論という批判が招来すると述べている（vgl.Zahavi 2003, 109）。

以上のことから分かるように、他者経験論が独我論として批判されているのは、固有領域への還元という「第五省察」に独特な方法に由来している。しかし、このような批判が正しいとするならば、他者経験論は、その嚆矢から誤った道を進んでいることになり、結果的にフッサールが目指した間主観性論自体が無意味なものとなってしまうのではないだろうか[1]。筆者は、このような疑念に応答するために固有領域への還元を検討する。そのために、本稿では、改めて固有領域への還元に関するフッサールの論述を精査し、独我論とする批判に応答した上で、その意義を明らかにしたい。あらかじめ結論を先取りしておくと、独我論との批判は、「第五省察」でのフッサールの目的と考察範囲を誤解することによって生じている。さらに、それを踏まえて、固有領域への還元の意義は、自己の経験領域を明確化することによって、間接的に他者の経験領域を明らかにすることにある。

本稿は、次のような手順をとる。まず、なぜフッサールが「第五省察」で他者経験論を展開したのかについて明らかにする（第一節）。さらに、他者経験論が具体的にどのように進められたのかについて、固有領域への還元に関係する範囲で確認する（第二節）。次いで、固有領域に寄せられた独我論としての批判を提示する（第三節）。そして、改めてフッサールの論述を検討し、これらの批判への応答を試みる（第四節）。以上の試みによって、固有領域の意義は、自己経験が及ぶ範囲の画定にあり、さらに、そこから逆説的に導出される他者の経験領域の解明にあることが示されるであろう。

第一節　他者経験論への道程

本節では、まず、次節以降の主題となる他者経験論及び、固有領域への還元がなぜ『省察』で展開されることになったのかを明らかにする。この問いに答えるためには、他者経験論が展開されている「第五省察」だけではなく、『省察』全体の目的に照らして考察しなければならない。

『省察』の目的とは、端的に述べると「超越論的観念論（der transzendentale Idealismus）」としての超越論的現象学の提示である。ここでの超越論的観念論は、フッサール流の認識論であり、デカルト以来伝統とされてきた、意識の内外という区別を前提とせず、意識から離れて成立していると考えられてきたあらゆる超越物を超越論的意識で構成さ

[1] ただし、フッサールは『省察』以外でも他者構成の問題に取り組んでおり（例えば『間主観性の現象学』草稿など）、「第五省察」への批判によって間主観性論全体が無意味になるわけではないかもしれない。しかし、少なくとも公刊著作として表立って議論された「第五省察」での他者経験論ないし、間主観性論に範囲を限定し、そこでの議論がいかなる意義をもつものなのかを検討することは、上述の『省察』以外での問題を考察することに対する足がかりとなるであろう。

れた志向的対象として理解する。この超越論的観念論は、その表現がまだ使用されていない『イデーンI』の段階でもすでに示唆されている。

> 純粋意識こそが求められていた「現象学的残余」として、残り続けるものである。それが残り続けるのは、たとえ我々が全世界をありとあらゆる事物や生物や人間、我々自身を含め「遮断して」しまうこと、あるいはもっと端的に言って、括弧に入れてしまったとしても、なお残りつづける、ということである。〔…〕この絶対的存在［純粋意識］は、正しく理解される時、あらゆる世界的な超越物をおのれの内に含み、それをおのれの内で「構成する」ものである（III/1, 106f.）[2]。

さらに「超越論的観念論」という表現が直接的に登場する「第五省察」の§41 では、具体的に次のように述べられている。

> 真の認識論は、超越論的現象学的な認識論としてのみ意味をもつことになる。真の認識論は、想定された内在から想定された超越（何らかの原理的に認識不可能と考えられた「物自体」といった超越）への、不合理な推論をするのではなく、もっぱら認識の働きを体系的に解明することに従事するのであり、そこでは、超越は徹頭徹尾、志向的な働きとして理解されねばならない。まさにそれによって、レアールなもの（reales）であれイデアールなもの（ideales）であれ、あらゆる種類の存在者そのものが、まさにこの働きにおいて構成され、超越論的主観性によって「形成されたもの」として理解されることになる（I, 118）。

すなわち、存在していることが素朴に信じられている超越物を括弧に入れ、その後に残る超越論的主観性でその超越物が志向的対象として「構成」される場面を記述することがフッサールの超越論的観念論の目的である。そして、この超越論的観念論が出発点とする無前提性こそフッサールが目指していた普遍学の特徴でもある。

しかし、以上のように普遍学たる超越論的観念論が提示されると、同時に還元される「あらゆる存在」というものの射程が問題となる。すなわち、超越論的主観性で構成される志向的対象には、客観的世界に属しているあらゆる対象が含まれている。そのような客観的世界の客観性をフッサールは「あらゆる人にとって経験可能（für-jedermann-Erfahrbar）」であることと定義している（I, 124）。だが、この「あらゆる人」は、超越論的観念論の操作である超越論的還元によって、その存在妥当性が括弧に入れられることになる。それゆえ、超越論的観念論の完遂には、還元によって残された超越論的主観性

[2] フッサールからの引用文は、慣例に従い Husserliana の巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で表わす。

で他者を構成し、客観的世界の構成を行う必要が生じてくる[3]。なぜなら、フッサールが目指していた普遍学は、文字通りあらゆる人にとって妥当する客観性を有していなければならないからである。

以上がフッサールが超越論的観念論から他者経験論へと移行した理由である。すなわち、還元がエポケーするものの中には他者の存在が含まれているため、還元後に残されるものは、完全に私の超越論的主観性の領野に過ぎないことになる。しかし、これはまさにフッサールが「超越論的独我論（der transzendentale Solipsismus）」と呼んだものであり、反駁されなければならない（I, 121）。

第二節　固有領域への還元とは何か

前節では、フッサールが「独我論」という批判に応答しなければならなくなった経緯を明らかにした。それでは、フッサールは、このような独我論にどのようにして応答したのだろうか。本節では、この点を明らかにしたい。

独我論に応答するためには、他者がエポケー後に残される超越論的主観性でも依然として存続していることを明らかにすることが求められる。よって、他者経験論の目的は、超越論的次元で他者がいかにして構成されるのかを厳密な仕方で記述することにある。さらにこの時、他者は、超越論的主観性とともに客観性を構成する共同主観である必要があるため、単なる自然的な他者ではなく、超越論的他者でなければならない。

そこでフッサールは、「第五省察」を始めるにあたって、ノエマ的他者を「超越論的手引き」とする。このノエマ的他者は、一方では「身体と独特な仕方で絡み合い、「心理物理的な」客観として、世界の「内に」存在して」おり、他方では私にとって「この世界に対する主観として経験」されている（I, 123）。ここでノエマ的他者が登場するのは、「第四省察」までの成果と、「第五省察」の出発点との差異を明確にするためである。すなわち、「第四省察」までの成果に従うならば、他者は、意識に与えられる意味としてのノエマ的他者となるはずである。しかし、フッサールによると、このノエマ的他者にはすでに「私が経験しているのと同じ世界を経験している」という意味が含まれている（I, 123）。だが、前節で見たように、ここで問われなければならないのは、同じ世界を経験する他者がいかにして構成されるのかであり、そのようにすでに同じ世界を経験している他者を考察の出発点にあらかじめ前提することはできない。それゆえ、「第五省察」では、「第四省察」までの成果として明らかになる「ノエマ的他者」に関わる志向的な働きに対して、新たな還元を施す必要が出てくる。それが「独特な種類の主題的

[3] 次田によれば、超越論的観念論をめぐる客観性の問題は、『イデーン』以来のフッサールの「客観的世界の構成記述」というプロジェクトに属している。すなわち、フッサールは、『イデーンI』で「領域存在論」のもとに客観的世界の構成を分析し、さらに、『イデーンII』では、客観的世界には、物体的自然のみならず有心的な他者の実在が属していることが提示され、この他者を超越論的方法によって記述する必要性が生じてきた（cf.次田 1999, p.50f.）。

エポケー（eine eigentümliche Art thematischer ἐποχή）」である。

この「主題的エポケー」は、異他なるもの（fremd）へと向けられている志向性によってなされるあらゆる構成的作用をすべて括弧に入れる操作である。すなわち「直接的であれ間接的であれ、異他なる主観性に関わる志向性がもつすべての構成的働きを度外視し、顕在的であれ潜在的であれ、特定の志向性全体へと限定する」ような操作である（I, 124）。そして、フッサールは、自己にとって「異他なる」という意味が何ら含まれていない領域を自己の「固有領域」と名付けている。他者経験論の出発点は、この固有領域であり、ここで他者が構成される過程を記述することが他者経験論の中心的な方法である。

ところでフッサールによれば、あらゆる異他なるものを括弧に入れた後に残る固有領域には、自己の経験を支える底層としての「単なる自然（die bloße Natur）」と自己の「生きる身体（Leib）」、他者の「物体的身体（Körper）」が属している[4]。そして、この他者の物体的身体が自己の固有領域に登場すると直ちに自己の身体との間に類似性が見いだされる。

> ところでいま、私の原初的領域の内に、私の身体と似ている物体が、すなわち、私の身体と現象的に対になるにちがいないような一つの物体が際立って現れてきた場合、その物体は、私の身体から意味が押し被せられることによって、直ちに身体という意味を受け取るにちがいない（I, 143）。

フッサールは、この連合的な働きを「対化（Paarung）」と呼んでいる。そして、この対化によって、自己の身体から他者の物体的身体へ意味の移入が起こり、他者の身体として理解されるようになる。以上が他者経験論における他者構成の概要である。しかし、この他者経験論は、『省察』成立当初から数多の批判に晒されてきた。本稿では、特に、他者経験論の出発点である固有領域への還元に対する批判を検討したい。

第三節　固有領域を独我論とする批判

本節では、固有領域を出発点とした他者経験論を独我論とする批判を検討する。しかし、その前にそもそも独我論とはいかなる主張であるのかを明らかにしなければならない。一般的に独我論とは、〈私だけが存在しそれ以外のものは私の意識に現れる仮象に過ぎない〉という主張である。ザハヴィによれば、フッサール現象学を独我論とする批

---

[4] Körper と Leib の訳語に関しては、両者とも「身体」とひとくくりに訳すことができる。しかし、フッサールは、これらの語を区別して使用している。Körper は、客観的に存在する「物体」としての身体という意味合いが強い。それに対して、Leib は、もともと Leben から派生した語であり、フッサールはこれをキネステーゼ感覚と結びつけて主観がまさに生きる身体という意味合いで使用している。本稿では、Körper を「物体的身体」、Leib を「生きる身体」と訳す。

判には（1）普通ある単一の意識だけが、すなわち自らの意識だけがあると主張する立場と、(2) 自分を除いていかなる他の主観も実際にあるかどうかを知ることは不可能である、とする二つの立場がある（vgl. Zahavi 2003, 109）。以上のザハヴィの指摘のうちで一般的な独我論にあたるものは（1）の立場である。それに対して、(2) の立場は、〈我々は他者の心が存在するのかを知ることができるのか〉というある種の不可知論的な問いに関連している。本稿では、(1) で述べられているような自己の意識以外の存在を認めないような立場を「存在的独我論」と呼び、(2) での他者の意識の存在は認めた上で、自己は、その意識の内容を知ることができないという立場を「不可知的独我論」と呼ぶことにする。しかし、本稿では、不可知的独我論については、扱わないことにする。なぜなら、不可知的独我論よりも存在的独我論のほうがより根源的な立場だからである。すなわち、不可知的独我論は、私以外の他者の意識が存在していることを認めた上で成立している立場であり、この立場から展開される批判に応答するためにも、まずもって存在的独我論という立場を検討する必要がある[5]。

それゆえ、本節の課題は、存在的独我論が固有領域をめぐる議論にいかにして適用するのかを精査することにある。だがこの課題を遂行するためには、まず固有領域がいかなるものかを明らかにしなければならない。しかし、ケルンも述べているように、固有領域がいかなるものであるのかを理解することは容易ではない（vgl.Bernet et al 1989, 146）。それは、フッサールの次のような非常に曖昧な言い方に起因している。

> 異他なるものに覆いをかけたとしても〔…〕世界を経験する私の生は、それによって影響を受けず、またそれゆえ、異他なるものについて私がもつ現実的、及び可能的経験そのものも影響を受けない（I, 129）。

すなわち、固有領域は、異他なるものへと向けられる志向性のもつあらゆる構成的作用を抽象的にエポケーされることによって残される経験領域であるにもかかわらず、その残された経験領域は、そのような抽象的エポケーの影響を受けないと断定されてるのである。実際、フッサールは、この規定を受けて、自己の経験領域で他者がいかにして構成されるかを考察している。だが、そもそもあらゆる異他なるものを括弧に入れた後にも異他なるものの経験が可能であるとするのは不可解な主張である。

ケルンは、この不可解な主張に固有領域の二義性を見て取っている（vgl. Bernet et al 1989, 146ff.）。すなわち、固有領域は、一方では、「考えられる最も根源的な自己所与性の領域」であり、そこでは他者のノエマのみが括弧に入れられ、他者へのノエシス的作

---

[5] またシュテーラーによると、フッサールは、間主観性論で他者の意識の問題を扱っていない（cf. Staehler 2008, 100）。すなわち、フッサールが扱っている問題は、あくまでも〈他者がいかにして経験されるのか〉という問題であり、〈他者に意識（心）が存在しているのか〉という問題を論じているわけではない。このような事情もあるため、本稿では存在的独我論という立場が他者経験論に対する妥当な評価であるかを検討する。

用が依然として残されている「原初的領域」である。この「原初的領域」は、「自我の全体的経験において直接に到達できるもの」を表しており、この領域での他者経験は、あくまでも自己にとっての他者の経験となる。しかし、他方で固有領域は、「他者経験の志向的相関者と〔…〕他者経験の体験とが廃去」されているような「独我論的領域」でもある。これは、まさに固有領域が開示されるときに施された抽象的エポケーによって導かれる。それゆえ、この「独我論的領域」では、いかなる他者経験も不可能である。つまり、この独我論的領域では、他者に関するノエシス－ノエマ構造自体が括弧に入れられている。ケルンによると、フッサールは「第五省察」で以上のような固有領域の二義性を混同しており、それが固有領域の明確な理解を困難にしているのである。

しかし、フッサールは、『省察』執筆後にこの二義性に気づき、改定作業を行っている。それによれば、原初的領域への還元は、私が経験によって妥当させている世界を私が直接的に経験しうるものへと還元することであるから「独我論的に還元された世界は、原初的世界と混同されてはなら」ず、原初的領域には「私の一切の感情移入する経験体験が属しているのであるが、しかし、たとえ正当にであっても、そこにおいて経験されている他者は属していない」（XV, 51）。それゆえ、他者経験論は、結局のところ独我論的領域で他者を構成するものとして理解されることになる。さらに、この点は、A.D.スミスによってもケルンへの批判という形で提示されている。すなわち、ケルンは、原初的領域では、他者のノエマのみが括弧に入れられると述べているが「フッサールにとってノエシスとノエマは、完全に分離することができないものである」ために固有領域は、原理的に独我論的領域として特徴づけられる（Smith 2003, 217）。

それでは、この独我論的領域を出発点とした議論は、前述した存在的独我論にどのような仕方で適用するのだろうか。固有領域が独我論として批判される論点は、なんといっても「主題的エポケー」という抽象化にあるだろう。たしかに、あらゆる異他なるものに関する構成的作用を括弧に入れ、自我に固有な経験領域をあらわにする操作は、自我のみが真に存在し、他者の存在は仮象であるとする批判を招来するように思われる。固有領域では、他者の身体が物体（Körper）として捉えられるのに対して、自己は、生きる身体（Leib）と心（Seele）を備えた「心理物理的統一体」として捉えられる（I, 128）。それゆえ、固有領域で他者は、まずもって単なる物体であり、真に存在するものは自己のみであって他者は自己が作り出した構築物あるいは、仮象に過ぎないという批判が導かれる。

以上のことから固有領域への還元が存在的独我論として批判されるポイントが示された。すなわち、フッサールがあらゆる他者に関する構成的作用を括弧に入れた後に残る自己の経験領域を独我論的領域としたことが存在的独我論として批判される要点である。

第四節　批判への応答と固有領域の意義

本節では、前節で示された存在的独我論という立場から招来する批判への応答を試みる。すでに述べたように、フッサールは、固有領域の二義性を自覚し、それが結局は独我論的領域として特徴づけられると考えている。しかし、ここで述べられている独我論的領域を出発点とする議論は、存在的独我論と同じものではない。以上の結論を導き出すために、本節では、次の二点を明らかにすることによって、応答を試みる。第一に、フッサールが「第五省察」で応答しようとしている独我論は、存在的独我論と一致するものではないこと、そして第二に、固有領域を中心とした他者構成は、存在的独我論のように他者を構築物として理解しようとしたものではないこと、である。

第一に、そもそも存在的独我論は、自己以外の存在を単なる意識現象、あるいは仮象として理解する。だがフッサールが「第五省察」で念頭に置いていたのはこのような独我論ではない。というのも、もしフッサールがそのような独我論に応答しようとしていたならば、「他者が存在すること」を証明しなければならなかったからである。しかし、「第五省察」で実際にフッサールが行っているのは、他者がいかにして存在するのかを解明することではなく、「調和的な他者経験」という主題で他者がいかなる志向性において理解されるのかを解明することである（I, 122）。すなわち、あくまでもフッサールが「第五省察」で目指していたのは、自己を超越する他者の存在を確実なものとして理解することではなく、経験可能な他者の現象を固有領域という自己のパースペクティヴが際立った領域で理解することである。

第二に、フッサールが述べるように、他者が固有領域で物体として捉えられるとしても、それは存在的独我論という批判を導くわけではない。たしかに、自己が生きる身体と心を備えた心理物理的統一体として理解され、他者は物体として捉えられるという主張は、一見すると他者を自我の構築物とする誤解を招くかもしれない。しかし、フッサールによると、もし他者が単なる物体だとしたら「私に固有で本質的なものの単なる契機に過ぎないことになってしまい、結局のところ他者自身と私自身とは同じものであったことになってしまう」（I, 139）。すなわち、もし他者が自我の構築物であるならば、その他者は、時間経過のなかで自我に与えられる現出の綜合によって充足しうるものとなってしまうため「もっぱら私の感性の形成体」として考えられることになる（I, 139）。しかし、他者とは、本来自己にとってくみ尽くせるものではない。というのも、フッサールが述べるように、他者が他者であるといえるのは「他者の体験も、他者がもつ現象も、他者に固有な本質そのものに属す何ものも根源的には与えられていない」からである（I, 139）。それゆえ、固有領域で他者が物体として経験されるとしても、それは、決して自己の構築物のように、完全に把握可能な仕方でくみ尽くされるわけではなく、常に他者に固有なものとしての「他者性」を間接的に経験することにつながるのである。

以上の二点から独我論的領域を出発点とする他者構成が存在的独我論とは異なる意味を有していることが明らかになった。しかしそれでは、独我論的領域としての固有領

域とは、結局のところいかなる意義をもったものなのだろうか。この問いへの解答には、フッサールが自己にとって獲得できる他者の経験を「原本的に到達不可能なものが確証可能な到達しうるもの」としたことが手がかりとなるであろう（I, 144）。すなわち、ここで他者は、自己にとって直接的に到達できないという仕方で経験できるものとして特徴づけられる。そして、そのような他者経験を明らかにするためには、自己の経験として直接的に到達可能なものがまずもって画定されねばならない。

フッサールによれば、自己経験が直接的に到達可能なものは自らの身体を中心とした「ここ（Hier）」で現前するものである。この〈ここ〉は、自己経験が常に空間的に位置をもった知覚経験であることを示している。そして、自己は、この特定のパースペクティヴによって世界を知覚しているのである。それに対して、他者の物体的身体は「そこ（Dort）」という様態を有している。この〈そこ〉は、自己が空間内で自由に動き回ることで常に変化する。だが、自己の〈ここ〉は、決して他者のいる〈そこ〉と完全に一致することはできない。なぜなら、ここでもやはり自己は、他者の体験を直接的に経験することができないからである。それゆえ、フッサールによれば、他者の体験は「付帯現前（Appräsentation）」という知覚経験によって経験される。そして、付帯現前は、「他者がもつもので原本的に接近不可能なものと与えてくれるが、それは（私固有なものとして与えられた自然の一部である〈他者の〉もつ物体が）原本的に現前することと絡み合っている」というように、他者の付帯現前は、自己にとって物体的身体として捉えられた現前を基礎として行われる（I, 143）。したがって、固有領域への還元は、我々が自明なものとして前提している他者の存在に関する構成的作用を括弧に入れることによって、自己の経験領域はどこまで及ぶことができるのかを画定しようとした思考実験であると理解することができる。すなわち、常に自己にとっての〈そこ〉を中心して行われる他者に固有なパースペクティヴ（他者の〈ここ〉）を間接的に捉えるために、まずもって自己に固有な経験領域を〈ここ〉として導出するための操作であると解釈することができる。そして、この思考実験の結果、自己の経験領域が〈ここ〉として画定され、その領域に決して一致しない〈そこ〉が他者の領域として逆説的に明らかになるのである。というのも、他者の〈そこ〉は、常に自己の〈ここ〉ではないものという仕方で措定されるものであるからである。以上が固有領域を出発点とする他者経験論の意義であろう。

おわりに

本稿の結論として、これまでの成果をまとめておこう。第一節では、『省察』で他者経験論が展開された理由を明らかにした。それによれば、超越論的観念論の深化によって、客観的世界の構成を論じる必要性が生じ、超越論的主観性で他者構成が主題的に考察されることになった。第二節では、他者経験論の具体的な展開を明らかにした。それ

によれば、他者経験論は、固有領域への還元を端緒とし、対化による身体構成を経ることで他我を構成するものであった。第三節では、独我論という立場がそもそもいかなるものであったのかを確認し、固有領域に対する批判が「独我論的領域」に関するものであることが明らかになった。第四節では、独我論という批判へと応答するために、「第五省察」の考察対象が他者の存在ではなく、他者の経験であることが再確認された。そして、それによって、固有領域への還元が自己の経験領域の画定を目的としたある種の思考実験であり、そこから他者の経験領域が逆説的に導出されることが示された。この他者の経験領域の導出が固有領域を中心とした他者経験論の一つの意義である。

最後に、今後の課題を提示することで本稿を締めたい。本稿では、固有領域への還元を出発点とする議論がある種の思考実験であり、その意味では方法的独我論であることが明らかになった。しかし、この応答でも他者経験論が独我論ではないと断定することはできない。なぜなら、固有領域への還元をめぐる議論があくまでも方法的独我論だとしても、その後に行われる自他の類似性を手がかりとした他者構成では、自我が他我に先行するという図式が容易に見て取られ、その点でも独我論という批判を免れないように思われるからである。この批判に応答するためには、対化現象を手がかりとした「感情移入論」が自我と他我の発生という観点で精細に論じられねばならない。これが今後の課題である。

参考文献

〈フッサールの著作 Husserliana〉

・Bd.I: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge,* hrsg. von S. Strasser, 1950, 2. Aufl., 1963.

・Bd.III/1: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie.* Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie, neu hrsg. von K.Schuhmann, 1976.

〈その他の文献〉

・Bernet, R., Kern, I., & Marbach, E. （1989） *Edmund Husserl: Darstellung seines Denkens*, Hamburg, Felix Meiner.（『フッサールの思想』、千田義光・鈴木琢磨・徳永哲朗訳、哲書房、1994 年。）

・Smith, A.D. （2003） *Routledge philosophy guidebook to Husserl and the Cartesian Meditations,* London and New York, Routledge.

・Staehler, T. （2008） “What is the Question to which Husserl’s *Fifth Cartesian Meditation* is the Answer?”, *Husserl Studies 24,* 99-117.

・Zahavi, D.（2003）*Husserl's Phenomenology*, Stanford, Stanford University Press.（『フッサールの現象学』、工藤和男・中村拓也訳、晃洋書房、2003 年。）

・次田憲和　(1999)　「「第五省察」の隠された論理：フッサール『デカルト的省察』における「他者構成論」理解のための一視座」、『近世哲学研究』6所収、46-74頁。

（たなか　かなた／千葉大学大学院人文公共学府　博士後期課程）